

明治18年・藩祖政宗公二百五十年祭の雀踊

東北歴史博物館

笠原 信男

1 青葉神社

(1) 神社の創建

仙台藩祖、伊達政宗公は武振彦命たけふるひこのみことの神号で青葉神社に祀られている。青葉神社は明治7年(1874)7月1日より創営に着手して本殿・拝殿・神楽殿・社務所等を建設、同年11月15日に鎮座祭が行われた。

神社は宮城県仙台市青葉区青葉町の北山丘陵に所在する。江戸時代に城下一の繁華街であった国分町からまっすぐ北に向かった高台(北山丘陵)の突き当たりに位置する。ここには伊達家の菩提寺で北山五山の中心、東昌寺があったが、寺域の西側3分の2が神社地に提供され、東昌寺はその東側の満勝寺跡寄りの現在地に移された。

明治期に藩祖を祀る神社が各地で創営された。それまで混交していた神と仏が分離され、皇室をはじめ、旧藩主家の多くは仏として祀っていた藩祖を神として祀る神祭に変えた。大名家の先祖祭祀は、家臣を含めた公的な祭祀であったが、維新後は大名家の家の祭りとなった。このため、各地の旧家臣は「旧主家の先祖を祀る神社を新に創建し、あるいは旧主家の先祖を祀る既存の霊社を譲り受けて、旧藩士民公共の神社とした」。こうして明治期に「48社が旧藩主家の先祖」を祀る神社として創営された⁽¹⁾。

青葉神社も同様の事情で、伊達家の家臣であった士族が政宗公を参拝できる場の設置を望み、関係者に願い出て創建された。旧家臣が「信徒組織の核を構成し、行政や地域の自治組織がそれ以外の地域住民を氏子や信徒に動員して受け皿を構築する」形で創建されたため⁽²⁾、氏子制はとらず「宮城県一円」に崇敬者が広がっている⁽³⁾。

(2) 神社の祭礼

仙台祭は東照宮の祭礼であるとともに、城下の町内連合や大店が山車を練り出す一大イベントで、藩を挙げて行う、藩内最大の祭り事であった。多い時は20台以上の山車、大勢の武者が神輿を供奉し、時には数千人の行列が城下の約10kmの行程を進んだ。

明治になり、仙台藩がなくなると仙台祭は東照宮の祭礼と山車と伴う祭りに分かれた。明治期に行われた山車を伴う祭(明治期の仙台祭)は、天長節てんちょうせつ(明治天皇の誕生を祝う祝日[11/3]:明治4年[1871])や招魂祭しょうこんさい(西南戦争等の国事に殉じた軍人、軍属等の慰霊祭:明治20年[1887]・21年[1888]・25年[1892]・29年[1896])、それに桜ヶ岡神宮祭いせどうさん(北山丘陵西端の伊勢堂山から今の西公園に遷座した明治5年[1872])、青葉神社祭礼(明治15年[1882])、それに仙台開設三百年記念祭(川内・瑞鳳殿・青葉神社:明治32年[1899])の8回である⁽⁴⁾。市内に電線が張り巡らされ、大掛かりな山車運行が困難になり、明治32年(1899)の仙台開設三百年記念祭を最後に仙台山車祭は姿を消した。

青葉神社は明治7年(1874)の創営後、伊達政宗公の命日のあたる5月24日に春大祭を行った。明治10年(1877)、11年(1878)の青葉神社祭礼は神輿渡御に山車が供奉したという新聞記事はない⁽⁵⁾。明治15年(1882)の祭礼は規模が大きく、東照宮の仙台祭を彷彿させる大掛かりな山車が出た⁽⁶⁾。山車は北鍛冶町1・二日町1・肴町2・国分町1・立町1・南町1・大町一丁目1・本材木町1から9台で、他に神社下の北山から大万燈^{だいまんどう}(大きな燈火)が出された。7台が担ぐ山車、2台が曳く山車で、担ぐ山車が多いのは江戸時代の仙台祭と同じである⁽⁷⁾。その後、明治18年(1885)の政宗公250年祭が大規模に行われた。神輿に供奉して、二日町の踊屋台→国分町の青葉社祭礼大旗・雀踊→東一番丁の踊屋台→各町消防組の花屋台(花で飾った屋台)・町名入り纏形花万燈^{まといがたはなまんどろ}(花で飾ったマトイ形万燈籠)→常盤丁の踊屋台→北山青葉社下の飾物→通町の仕掛燈籠^{しかけどうろう}が出ていた。この詳細は次章で触れる。

2 藩祖政宗公250年祭の各町奉納物

(1) 奥羽日日新聞の祭礼記事

仙台藩初代藩主、伊達政宗公は寛永13年(1636)5月24日、満68歳で、江戸において死去した。遺体は6月3日に仙台へ戻り、生前の遺言により経ヶ峰に埋葬された。の

年月日	場所	内 容
明治十八年五月	二十三日 瑞鳳寺	法会 読経・祭文読上げ・拝礼・能狂言奉納・花火
	青葉神社	宵祭、詠歌披露・講中献膳 各町花灯提
	二十四日 瑞鳳寺	法会 各宗僧徒
	瑞鳳山	御廟祭典 祝詞・玉串・拝礼・撒饌 殉死人の祭式・戊辰西南両役戦死人吊魂祭、向山にて花火(昼・夜)
	青葉神社	本祭 献膳・御霊遷しの式
	市中	神輿渡御 発10:30 着18:00 続いて流籠馬と神楽奉納。 神輿渡御屋台 武者 神輿 二日町踊屋台→国分町青葉社祭礼旗・雀踊→東一番丁踊屋台→各町消防組花万燈屋台→常盤丁踊屋台→青葉社下飾物→通丁仕掛燈籠 大太鼓→杖曳→勝色金丸の旗一流→赤蛸牡丹と引両紋の旗一流→伊達道具(槍二筋)→払いの騎馬→流鏑馬射手3・馬場払い騎馬1・騎射射手20騎・甲冑武者80余名→惣大将 獅子頭2・道払1→切幣→「武振彦命」神号旗→大榑→陣太鼓・笛→先駆神官→塩撒・弓矢・大幣→祠官→神輿・供奉神官→惣締め
	二十五日 青葉神社	献膳式 報恩講社奉納 剣槍の試合、能狂言、騎射奉納、神楽奉納 見世物(東一番丁の玉木座主人の世話:大蛇・刀玉等)

明治18年(1885)・藩祖政宗公250年祭 『奥羽日日新聞』から作成

ちの瑞鳳殿である。

明治18年(1885)の政宗公没後250年祭は政宗公を祀る青葉神社だけでなく、経ヶ峰の瑞鳳寺、それに御廟(瑞鳳殿)でも行われた。青葉神社と御廟は神式、瑞鳳寺は仏式であった。当時の奥羽日日新聞が詳細を5回に分けて記事にしている。そのうち青葉神社の屋台等の行列は以下である(『奥羽日日新聞』明治18年5月28日)。

「各町より曳出したる新趣向、先、櫓下四郎⁽⁸⁾を音頭にチャンチキリンの馬鹿囃子、エンヤラヤッと曳出せしは是れぞ則ち、二日町若者連の出し物にて青葉の誉れ鎧の草摺とは三人の娘が手踊の曾我に因みしものなるべし。屋台に仕掛し自来也が造物さへ栄ありし。仰又、四郎が当日の其打扮を見てあるに、伊達大縞の単物に折目違の麻上下を着け、頭は丸く刺落し、唐子形なる大額に赤と黄をしも糾交の向ふ鉢巻を、め、腰には丸棒を十文字に佩、右手に鉄棒突たる状は実に第一の興なりけり、国分町の雀踊はむかしの形を其儘に、揃いの編笠一様の袴纏姿も勇ましく、神楽囃子の評子能く、青葉社御祭礼の大旗を踊りながらに曳せたり。是れをば則ち伊達模様乳母の児遊びとぞ名号たる。其故、由は知らねとも思ふに、必竟、政岡が忠と鳴音に因みあれ、竹に雀は伊達家の御紋、是等に依ての趣向ならめ、次には其名も奥床し青葉の群鳥連中は確も美登代が振付の手振も床し、群千鳥月に兎の詳かに見ゆるや餅突杵の音京を花笠布晒し、上は糸竹其が下に付添ふ竹花が口上に景色をましたる屋台こそ、東一番丁より曳出せし物とは誰も知られけめ、花万燈に町名を印し纏に形取しな其真先に進まして屋台を徐々曳せしは是れ各町の消防組、名も勇肌街の鉢巻、実に勇みある趣向にて其が踊手は幸菊連娘芝居の名題物、廊内限りは常盤丁、其名も縁りの廊の友・恋のしがらみと称せしも故えあり気にぞ思はれたり、一体誰の好人か夫々名をば附したりけんいと面白く思ひし中にも青葉社下の造り物を郭公と云ふ歌題に因み時鳥青葉の一声と名号しは大神の御威光は青葉山に鳴初し時鳥の一声と共に雲井の庭まで聞え上なんと祝言なるべく口、通丁の仕掛物を其むかし花の曙と呼しは大神世に座せる時、御軍に勝せ玉ひ終に是れの青葉城を築かせ玉ひし時を様のなるべしと思へば中々に云ひ尽せる譬にこそあらめ、先廿四日の景況は大略如斯」。

当初は、この他に北材木町が「神遊天の御剣」の曳き屋台で参加する予定であったが、「世話方に何か故障起りて」不参加になった(『奥羽日日新聞』明治18年5月21日)。

二日町・国分町は仙台祭にも山車を出していた。今回、二日町は踊屋台に手踊、国分町の雀踊の人数は「男女百名」である(『奥羽日日新聞』明治18年5月19日)。東一番丁は江戸時代、伊達家家臣が住んでいた侍丁であり、江戸時代に山車を出したことはない。明治になり店が軒を並べるようになり、次第に繁華街化した。これにともない、今回、初めて踊屋台に美登代振付の手振で参加した。以後、20年、21年、32年の招魂祭でも出

している。消防組は花を飾った「花屋台」(『奥羽日日新聞』明治18年5月19日)と各区の町名を入れた纏形の花で飾られた万燈籠に幸菊連娘芝居を伴っての参加である。

順番	丁・町名	屋台等の名称	出し物	備考「追加記事」
各町より曳き出したる新趣向、櫓下四郎を音頭に				
1	二日町	青葉の鶯れ籠の草摺	踊屋台 & 手踊	屋台に自来也の造物
2	国分町	伊達模様乳母の児遊び	青葉社御祭礼大旗 & 雀踊	「男女100名の雀手踊(M18.5.19)」
3	東一番丁	奥床し青葉の群鳥	踊屋台 & 美登代振付の手振	
4	各町消防組	勇み肌街の鉢巻	「花屋台(M18.5.19)」 & 町名入り纏形花万燈	幸菊連娘芝居。「東座」の「幸菊の(高橋)お伝は」「中々出来よし(M18.5.21)」
5	常盤丁	廓の友・恋のしがらみ	踊屋台 & 「俄踊(M19.5.26)」	娼妓雛妓連(M18.5.19)。「俄則ち踊屋台は当世流南京踊(M19.5.26)」
6	北山青葉神社下	時鳥青葉の一声	飾物	
7	通町	其の昔は花の曙	仕掛燈籠	

藩祖政宗公 250 年祭の各町の出し物

『奥羽日日新聞』記事から作成

常盤丁は伊達家重臣の屋敷が連なることから大名小路といていた。それを明治10年代に造成して常盤丁(のちに元常盤町)にし、明治初期から国分町で増加した遊廓を移した。常盤丁も明治18年(1885)が初めての参加で、以後の仙台祭にも参加している。今回は踊屋台に廓内で組織された娼妓雛妓連(公娼・一人前でない芸妓、舞妓)が従う(『奥羽日日新聞』明治18年5月19日)。連の踊は翌年の記事、「俄則ち踊屋台は当世流南京踊」を参考にすれば俄踊である(『奥羽日日新聞』明治10年5月26日)。北山は明治15年(1882)の青葉神社祭礼に大万燈を出したのに続いての参加であるが、知られている記録ではこの2回のみの参加である。通町は職人町で町家がないため、江戸時代に町人が請け負った仙台祭の山車を出したことがない。明治以降の天長節や招魂祭でも出したことがなく、記録にある限り、通町が山車を出したのはこの時のみである。

行列は当時の仙台市域の北端にある青葉神社を出て、通町・二日町・国分町と市街へまっすぐ南下し、この年は芭蕉の辻を東に折れ(左折し)ながら、市城南端の新河原町まで行き、帰りはそれを逆行し、途中は木町通から神社下(北山)を経て戻るルートであった。午前10時に出発して到着は午後6時過ぎ、途中に昼食を挟んで、約13km・8時間以上の長丁場であった⁽⁹⁾。

(2) 江戸歌舞伎・曾我祭の影響

仙台祭の山車は江戸時代から担ぐ山車が一般的で、曳くのは少数であった。ところが、明治18年(1885)は二日町・東一番丁・常盤丁・消防組、さらに参加予定であった北材木町を含め、すべてが曳き屋台である。しかも二日町・東一番丁、常盤丁は囃子連が曳き屋台に入って演奏しながら進む、踊屋台である。

新聞記事の「新趣向」は、記事の文脈から櫓下四郎が行列の先頭であったことの可能性もあるが、彼は明治9年(1876)の宮城博覧会でも行列に先頭で踊った前例がある⁽⁸⁾。これを除くと、ほぼすべてを曳き屋台(踊屋台)にしたことが「新趣向」であろう。しかも、踊屋台はそれぞれ踊り子を伴っていると思われ、踊の行列が神輿を先導するスタイルである。こうした形の神輿供奉は、担ぐ山車が多かった、仙台祭やそれを継承した明治期の天長節、招魂祭、それに明治15年(1885)の青葉神社祭礼の山車行列にもない。

「揃いの編笠^{あみがさ}」、「一様の袴纏^{はんでん}」に「竹に雀」模様が入った国分町の雀踊は、「雀の歩くさま」を「竹に雀の模様の着物を尻端折りし、三里当をした奴^{しりはしよ}姿^{さんりあて}に編笠をつけて行列式に踊るもので、初期歌舞伎に入って大いに行われた。芝居の五月の曾我祭には、長唄にて花笠踊とともになくてはならぬ大踊(幕の最後に行われる一座全員による踊)」であった⁽¹⁰⁾。国分町の雀踊の姿は歌舞伎舞踊の雀踊そのものであった。

曾我物があり雀踊が行われるといえは江戸歌舞伎の曾我祭が思い起こされる。曾我祭は「芝居の守護神として楽屋に祀っていた曾我荒人神^{そ が あらひとかみ}のお祭り」である⁽¹¹⁾。曾我荒人神は鎌倉時代に親の仇を討った曾我兄弟を祀ったもので、江戸では新春の邪気を払うために、新春狂言に曾我物を上演することが恒例であった。初春狂言の曾我物が大入りで、さらに5月まで曾我物の興行が継続した時、討入が成就した5月28日前後に催された。

曾我祭が始まったのは宝暦3年(1753)⁽¹²⁾、もしくは宝暦6年(1756)⁽¹³⁾といわれる。そのうち宝暦6年(1756)の内容は以下である。

「宝暦六年、市村座にて曾我祭を執行ふ。当日仕切場・留場・楽屋三階にも皆行灯・桃燈^{あんどん}をつるし、いろいろ賑はしく飾り立て、芝居中、伊達衣裳には蝶と千鳥との染模様のゆかたの揃ひ、昔は花出し・ねり物・はやしの家体^{ちようちん}など役者中花やかにかさりて、山王明神祭りの如にして、芝居木戸口より表町内・楽や・新道廻り・隣町を通りて、又木戸口より花道へかかり舞台に入る事、寛政(1789～1801)年の末まであり」⁽¹⁴⁾。

寛政6年(1794)都座・桐座・河原崎座の江戸三座でかなり派手に行われ、曾我神社の神輿は市中にも出た。それに付き添う踊もいろいろあった。この年、幕府からお咎めを受け、以後、曾我祭は楽屋・舞台での行事になった。

「五月、都座及桐座にて「曾我祭」に、役者のほか芝居掛りの者まで目立ちし衣裳を着し、花出し、萬度、往還持歩き候には、傳内(都座の座元)、長桐(桐座の座元)はしめ両町(都座のある堺町・桐座のある葺屋町)家主並名主松五郎・庄左衛門一同御答^{おとがめ}」⁽¹⁵⁾。

「五月廿七日より、「曾我祭」出る。松ヶ枝踊^{まつがえおどり}、雀おとり、女夫^{おんなおとこ}おとり、住吉おとり、角力^{すもう}おとり、其他色々趣向仕候。堺町(都座)・葺屋町(桐座)両座共に曾我祭、花やかにて大評判。これより「曾我祭」なし」⁽¹⁶⁾。

「(河原崎座)五月廿七日から曾我まつり櫓、太鼓、猿田彦、獅子、花出し、花笠けい
ご、ぎをんばやし、^{祇 岡 雛 子} 俄、^{にわか} 雀踊 ^{おんながたしきのはなおどり}、女形四季花踊、惣おどり、四神、御神
輿」(17)。

政宗公 250 年祭は曾我神社の神輿行列に供奉した囃子屋台・花山車・万燈を踊屋台
(二日町・東一番丁・常盤丁)・花屋台(消防組)・花万燈(消防組)とし、随伴する各歌舞
伎舞踊は手踊(二日町)・雀踊(国分町)・美登代振付の手振(東一番丁)・俄踊(常盤丁)と
した、まさに江戸歌舞伎・曾我祭に倣う「新趣向」であった。歌舞伎舞踊の核は竹に雀
にちなみ雀踊とし、それを担った国分町が「青葉社御祭礼の大旗」を曳いた。寛政6年
(1794)のお咎め以降、江戸でも小規模化した雀踊を「^{とが}むかしの形を^{かた}其儘^{そのまま}」に復興したの
は青葉神社の春大祭日が曾我祭の4日前という神縁も関係があろう。

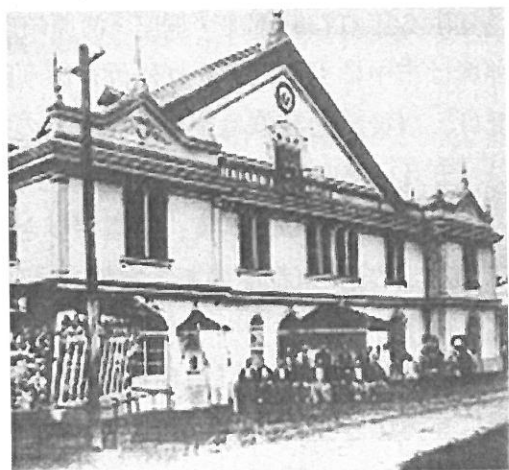
雀踊は田植踊の余芸として天保12年(1841)正月に仙台北下で行われている(18)。

「(現代語訳)正月2日、3日から万歳、田植踊^俄などが出てくる。(中略)「はねこ田
植」は、若者衆がいろいろな思いつきで行うにわか芸である。虎狩、雀おどり、唐人、
龍人などは、弥十郎の仕切りにて、遊び、楽しみとして出てくる。三味線はなく、はや
囃しは笛、太鼓、^{すりかね} 摺鉦で、町中を跳ね廻り、大家に跳ね込んで祝儀をもらい、それで酒
を飲んで騒いだ」。俄芸、虎狩、雀おどり等の田植踊余芸は歌舞伎の狂言や舞踊を借
用したと考えられ、雀踊は江戸時代の芸能に導入されていた前史がある。

(3) 仙台・芝居劇場の影響

仙台において1500人前後の収容人数がある大劇場で東京や上方から著名や役者を招
いて上演できるのは、明治2年(1869)に開場した松浦座が最初である。北目町に建設さ
れた松浦座は明治12年(1879)に名称を宮城座に替えた。同座は近くに出来た洋風の改
良劇場仙台座に押され、明治29年(1896)に廃座になってしまう。

改良劇場仙台座は明治時代に起きた演劇改良運動と関連がある。これは歌舞伎を近代
社会にふさわしい内容に改めようとする運動である。貴人や外国人が見るにふさわしい
道徳的な筋書きにし、史実とはかけ離れた時代
物をやめ、女優を出演させ、花道を廃止するな
どの改良が提言された。だが、写実的な演出や
史実に則した時代考証に努めたため、従来の歌
舞伎と異なる内容を見た観客が呆然となるな
ど、庶民に不評で改良運動は成功したとはいえ
なかった。しかし、明治20年(1887)、明治天
皇が歌舞伎を観覧するなど、庶民のものであっ
た歌舞伎及びそれを演じる歌舞伎役者の地位
向上に役立った。



仙台座 『仙台市史特別編4』より

規模	名 称	場 所	開場又は改称年月	廃座・焼失時期	備 考
大劇場	松浦座	北目町	明治2年		1400人。
	宮城座		明治12年3月	明治29年8月廃座	1400人。松浦座を改称。
	改良劇場 仙台座	東四番丁・南町 通角	明治23年11月22日	戦災で焼失	2500人・間口11間半(縣史)。1400人、間口14間・奥行20間(市史)。
小劇場	大新亭	東一番丁・森徳 横丁	明治12年以前		別名:合唱亭。500~600人。
	中嶋座		明治16年10月		大新亭を改称。
	東座		明治17年11月		中嶋座を改称。
	森民座		明治25年10月		東座を改称。
	森徳座		明治33年9月		森民座を改称。
	錦輝館		大正4年7月25日	昭和6年1月12日焼失	活動写真常設館。
	玉木座	東一番丁・立町 通の北角	明治5年	明治19年廃座(縣史)	400~500人程度。500~600人。
	吉岡座	桜ヶ岡公園内	明治6年	明治15年廃座	1000人。
	松島座	東一番丁・立町 通南	明治18年2月24日		桜ヶ岡から移転。明治25年に間口15間・奥行20間に改築。
	仙台パテー館		明治45年3月		松島座を改称。活動写真常設館。
	松島座		大正8年7月	大正13年12月30日焼失	再び歌舞伎、後に再度、映画上映。
	莊義座	東一番丁・南町 通	明治39年1月2日		300~400人。
	改良座		明治40年1月14日	明治40年9月17日焼失	跡地に日本生命(昭和3年)。
	開明座	国分町・元櫓町	大正2年10月3日		
	仙台歌舞伎座		大正9年7月7日	戦災で焼失	開明座を改称。1500人(縣史)。

明治期・仙台の芝居劇場 『東一番丁物語』・『宮城縣史第14巻』・『仙台市史特別編4』から作成

役者としてこの運動を推進した九代目市川団十郎も明治20年(1887)代には伝統歌舞伎くだいめに戻った。そこで荒事あらごと(武士や鬼神などを荒々しく演じること)を整理するなどして今日に伝わる多くの形を決定し、庶民の娯楽から日本文化を代表する芸術の域に高めることに尽力した。

演劇改良運動に刺激を受けて、日本帝国改良演劇歌舞伎座が明治22年(1889)、東京・京橋(中央区銀座)に開場するなど、歌舞伎の新時代を画した。仙台では仙台駅(明治20年[1887]開業)近くに改良劇場仙台座が明治23年(1890)に開場した。前年に出来た東京・歌舞伎座を範とし、当時、市内最大の洋風劇場であり、演劇改良運動が仙台に力強く及んでいたことを物語る。

小劇場は明治18年(1885)の時点で、東一番丁沿いに東座あずまざ(収容人数:500~600人)、玉木座(収容人数:500~600人)、松島座(収容人数:約1000人)が並んでいた。これらの小劇場は東京等から有名や歌舞伎役者を招いて上演するのは、興行収入・収容人数の

関係で困難だったようで、地元や福島的一座を招いて上演した。この一座には地元で組織された女芝居的一座が含まれ、後述するように、明治18年(1885)の政宗公二百五十年祭の踊屋台行列に加わった。

玉木座は東一番丁の三座のうち最も早く、明治5年(1872)に建てられた。玉木座を経営した玉木鉄五郎は政宗公二百五十年祭の5月25日、青葉神社境内に小屋掛けされた「見世物」を世話し、東京・銀座から「長サ二丈三尺(約6.9m)、太サ三尺三寸(9.9cm)」の大蛇等の公開に尽力した(『奥羽日日新聞』明治18年5月29日)。

(4) 仙台・女芝居の影響

女性のみで歌舞伎を演じる女芝居は全国的に江戸時代後期から大正時代にかけて行われた。江戸時代初期には女歌舞伎が存在していたが、寛永6年(1629)に禁止された。以後、江戸城の大奥、あるいは諸藩の屋敷において、男性の役者に代わって歌舞伎や狂言などを披露する女性たちがおり、明治維新後にそうした女性たちが女役者として芝居小屋で演じ、各地に女役者一座が組織された。

明治24年(1891)に神田三崎町で開業した三崎座は女芝居の代表的な劇場として知られ、そこで座頭を務めた市川九女八いちかわくめはちは女役者の名優として知られる。九女八は「女団十郎」とも呼ばれ、実際、九代目市川団十郎唯一の女弟子であった。市川九女八は仙台の劇場でもたびたび公演するだけでなく、仙台・女芝居の役者を弟子にもした。

年 代	満年齢	事 績	
明治6年	1873	28歳	八世岩井半四郎に入門し、岩井桑八を名乗る。
明治18年	1885	40歳	奥羽日日新聞5月12日刊に「岩井久米八」の記事掲載 「女俳優の団州」「はやく当地宮城座(明治12年開場)に下り、興行せし事なりしが今なほ(仙台に)同優を慕う者」多し。
明治21年	1888	43歳	九世市川団十郎唯一の女弟子となり市川升之丞、市川桑八に改名。
明治26年	1893	48歳	東京神田・三崎座(女芝居の代表的劇場)の座頭となるが、翌年脱退。
明治27年	1894	49歳	市川団十郎家のお家芸『勸進帳』を無断上演し、破門される。
明治30年	1897	52歳	許されて市川団十郎門下に復帰し、市川桑八を市川九女八と改名。
			4月、仙台・東一番丁の森民座で市川九女八が興行。
			6月、仙台・梅三芝居の小佐川梅栄が市川九女八に弟子入りして、市川華昇と名乗り、仙台・森民座で改名披露の興行。
明治34年	1901	56歳	5月、仙台・東一番丁の森徳座(森民座を改名)で市川九女八一座が松永憲太郎一座と合同で興行。
			10月、仙台・森徳座で市川九女八一座による単独興行。
明治38年	1905	60歳	若柳燕嬢(女性落語家)が企画した「女優大会」の興行に参加。
明治39年	1906	61歳	若柳燕嬢とともに女優学校を東京麹町に設立。
明治41年	1908	63歳	川上音二郎(近代演劇の祖)・川上貞奴(近代女優第1号)が開所した東京芝・帝国女優養成所で旧劇(歌舞伎)の講師を務める。
			仙台・森徳座で市川九女八一座による興行。
大正2年	1913	68歳	東京浅草・みくに座出演中に急逝。

市川久女八と仙台の劇場 『東一番丁物語』・『奥羽日日新聞』から作成

仙台では東一番丁の劇場を中心に女芝居が演じられた。梅三芝居は肴町三丁目の料理店「梅三」の女中たちによって組織された女芝居一座であった。

「梅三芝居の芝居の噂話に、明治4年(1871)東北鎮台が仙台に置かれた際、司令官として来任した陸軍大佐三好重臣は最も梅三芝居を愛顧、ひいきし」、「明治5年(1872)青葉神社祭礼の時、各町から祭の山車がたくさん出たが、その中のある山車の象を飾ったものの上に乗って舞踊った一人一艶麗花を欺く様な美しい娘が三好司令官の御目に」、とまった。「この娘は南町の八百屋の娘で、梅三芝居の美貌と人気者での第一人者であった」という⁽¹⁹⁾。

青葉神社は明治7年(1874)創建なので、「明治5年(1872)青葉神社祭礼」は正しくない。三好重臣陸軍大佐が東北鎮台・仙台鎮台の司令長官として仙台で任務に就いていたのは、明治5年(1872)3月23日から明治7年(1874)8月20日なので、事実とすれば、明治5年(1872)10月17日の桜ヶ岡神宮(明治5年[1872]に西公園遷座)の祭礼行列であろう。三好大佐の話は単なる噂としても、明治4年(1871)の天長節に出た山車24台のうちの一つ、肴町「大漁祭栄の舳」の曳き屋台に随伴した舞子7人のうち何人かは梅三芝居の女役者と推定できる⁽²⁰⁾。

各町消防組の花万燈に従う踊手の「幸菊連娘芝居」は仙台で女芝居を上演していた尾上幸菊一座のことである。座長の幸菊はこの時に17歳であった。東一番丁の東座で、祭礼直前の明治18年(1885)4月から新作物「高橋お伝」⁽²¹⁾、さらに5月の政宗公250年祭の月は東座で新狂言「萩の信夫の色くらべ花」を掛けていた(『奥羽日日新聞』明治18年5月27日)。

4月上演の「高橋お伝」は実在した殺人犯で、明治12年(1879)に斬首刑になり日本で最後に打ち首となった者とされる。彼女の生涯を歌舞伎に仕立てた新作物は5月上演の新狂言とともに演劇改良運動の所産であろうが、政宗公250年祭での踊りは「名題物」とあるので、古典の歌舞伎舞踊と思われる。

二日町の「青葉の誉れ鎧の草摺」は舞踊の場面がある歌舞伎の曾我物「鎧の草摺」にちなむ。兄の曾我十郎が父の敵と対面していると知った弟の曾我五郎が、仇の館に向かおうとする。それを兄弟の保護者、小林朝比奈が五郎の鎧の裾に垂れた草摺を持って引き留めるが、大力の二人が引き合ったために草摺がちぎれるという話である。朝比奈の代わりに妹の舞鶴が出ることもある。

屋台は「自来也」の造物とある。自来也は読本(伝奇風の小説)に登場する架空の盗賊で、歌舞伎でもしばしば上演された。しかし、政宗公250年祭の記事に「三人の娘の手踊」とあることから、男性の自来也ではなく、東一番丁・東座で明治18年(1885)3月18日から掛けられた「女自来也鬼神お松」で、手踊をしたのはこれを演じた東巳之吉女歌舞伎一座⁽²²⁾の可能性が高い。鬼神お松は歌舞伎・読本・錦絵などで石川五右衛門、

自来也とともに、「日本三大盗賊」といわれた女盗賊である。

仙台の女芝居一座は稀代の悪女といわれる「高橋お伝」や「鬼神お松」等の新作物を演じており、歌舞伎の演劇改良運動を取り入れて活発に活動していた。また、政宗公250年祭の踊行列では女芝居の役者が重要役を果した。

(5) 青葉神社周辺神楽への影響

青葉神社は明治7年(1874)の創営時から境内に神楽殿が設けられていた。神社附属神楽が存在した記録はないが、明治10年(1877)の祭礼において5月24日の神輿渡御の前日に神楽が奉納されている⁽²³⁾。明治18年(1885)は5月25日、政宗公250年祭の3日目、剣・槍の試合が終わったのは午後五時頃、すぐに能狂言、その後に騎射(当日、10騎が輪をなした状態から、合図で駆け出し、速い者勝ちで的を射抜いた)があり、終わって「直ちに神楽を奏された」(『奥羽日日新聞』明治18年5月30日)。この時に演じられた神楽がどんなものであったか、詳細が記事にないのはたいへん残念である。

宮城県の仙台以南で行われている神楽は十二座神楽と呼ばれる。「座」は演目のことで、12番前後の演目を笛・太鼓に合わせて舞踊のみで演じるものである。一般に「舞い」は旋回動作、「踊り」は跳ねる動作が基本とされ、十二座神楽は「踊り」の要素が

番号	通町熊野神社神楽		仙台東照宮神楽		瀬田谷不動尊神楽(廃絶)	
	演目名	備考	演目名	備考	演目名	備考
1					塩ふり	
2	神子舞	二人神子舞	巫女舞	初舞。二人巫女舞	神子舞	初舞
3	かしは舞	前半は栗落し			かしわ舞	三番叟
4	種コ播き		一人種まき舞	二人種まき舞	種蒔	
5	狐とり舞				狐取り	
6	一人剣	二人剣舞・三人剣舞	つるぎ舞	廃曲。三人剣舞	一人剣	三人剣
7	夷大黒舞	ふな釣舞とも。	鮒釣り舞	大黒も出る。	鮒釣り	大黒も出る。
8	天岩戸		天の岩戸	廃曲	岩戸開	
9	蛇切り舞	廃曲	蛇切り舞		蛇切り	大蛇退治、終舞
10	素戔鳴舞	鍾馗さん	あんまとり舞			
11	弓射り舞		弓取り舞		弓とり舞	
12	獅子とり舞				獅子とり舞	
13	狂言馬鹿囃子		種まき舞	鬼と農夫の相撲、他に鍾馗		
	狂言玉とり姫		力だめし舞		烏天狗の舞	
番外	各演目前後に道中囃子に似た馬鹿囃子を奏す。		はねっこ(大正～昭和頃)	神輿巡幸で演奏。	雀踊り	別名ハネッコ。幕締め後、全員で踊る。

仙台神楽・通町系神楽

強い神楽である。青葉神社周辺で行われている十二座神楽の系統は仙台神楽・通町系^{とおうちょうけい}とされ、他の十二座神楽と比べて一段と「踊り」が軽快とされる。現在行われているのは通町熊野神社神楽(青葉区通町)と仙台東照宮神楽(青葉区東照宮)の二つである。かつて行われていた、瀬田谷不動尊神楽^{せたやふどうそんかぐら}(青葉区八幡)、堤町天神社神楽^{つつみまち}(青葉区堤町)、二柱神社神楽^{ふたはしらじんじや かぐら}(泉区市名坂)、荒町毘沙門神楽^{あらまち}(若林区荒町)も同系であった⁽²⁴⁾。

仙台東照宮神楽は山車祭りを兼ねた仙台祭が変貌し、東照宮祭礼として行われた明治以降、膝元である宮町の人たちが始めた⁽²⁵⁾とされる。創始時期は不明だが、明治19年(1886)5月の東照宮祭礼で「神楽もありて」の記事があり、この時すでに奉納された(『奥羽日日新聞』明治19年5月22日)。政宗公250年祭で青葉神社に奉納したのは、神社から500mしか離れていない、青葉神社膝元の通町熊野神社神楽の可能性が高い。

通町系神楽で注目するのは「ハネッコ」と呼ばれる踊りである。瀬田谷不動尊神楽の「最後に演じられる雀踊りでは舞手全員が舞台上で跳びはねるように舞われ、最も勇壮な舞で見物人の目を楽しませた。雀踊りはハネッコともいわれ、青葉城築城⁽²⁵⁾の際、石屋が伊達政宗の前で演じたのが始まり」と伝えられている⁽²⁶⁾。

ここでの「雀踊り(ハネッコ)」は幕締め後に全員で踊られる。これは、江戸時代後期の江戸歌舞伎で盛行した曾我祭の大踊^{おおおどり}(幕の最後に行われる一座全員による踊)・雀踊を思い起こさせる。

明治18年は演劇改良運動の最盛期で、仙台の劇場や女芝居の盛況はその影響下にある。政宗公250年祭の内容は当時の芝居文化を背景に蘇我祭を藩祖の祭として再生させたもので、演劇改良運動という時代の所産でもある。通町系神楽のハネッコに、明治18年の政宗公250年祭の踊等、時代の遺産がどんな形で伝承されているのかを改めて検討するのも有益であろう。

注

(1) 森岡清美「明治維新时期における藩祖を祀る神社の創建―旧藩主家の霊屋から神社へ、地域の鎮守へ―」

『淑徳大学社会学部研究紀要第37号』2003年p130

(2) 注1文献p143

(3) 宮城県神社庁編『宮城県神社名鑑』1976年p13

(4) 三原良吉「維新後における仙台祭」『仙台郷土研究』第6巻第6号無一文館書店1936年p43

(5) 佐藤雅也「近代仙台における庶民の生活暦(2)」『足元からみる民俗(15)』2007年p84・85

(6) 注4文献

(7) 仙台祭の山車は宝永5年(1708)以降、「担ぐ形式のものになった」。それまでは「綱をつけて引くものが主体であった」。

小井川和夫「仙台祭についての覚え書き」『東北歴史博物館研究紀要2』2001年p128・129。

なお、本稿は山の形状のものを「山車」、それがなく屋根の付いたものを「屋台」とした。

- (8) 福の神といわれた仙台四郎のこと。現在の県議会棟の北西隅にあった櫓近くに住んでいたのが櫓下四郎と呼ばれた。当時30歳。なお四郎は明治9年(1876)に桜ヶ岡公園(西公園)で開催された宮城博覧会でも踊り衆の先頭で踊った。
- 栗野邦夫『不況を吹き飛ばすという福の神 仙台四郎のなぞ』ワードクラフト1993年p154
- 丘修三『福の神になった少年―仙台四郎の物語』佼成出版社1997年p112
- (9) 『奥羽日日新聞』明治18年5月26日(出発時刻)、明治18年5月27日(「芭蕉辻より東に折れ、南町をば後にされし」、「他は凡て例の通り」・到着時刻)、明治19年5月26日(「道筋は例の如く新河原町迄、夫より引返し」、「木町通りより還御」)。
- (10) 郡司正勝編「雀踊」『日本舞踊辞典』東京堂出版1977年p216
- (11) 吉川周平「曾我祭」『世界大百科事典第16巻』平凡社1988年p360
- (12) 「春狂言六月まで大入大当。此年より五月曾我祭はじまる」。
- 立川焉馬「花江都歌舞妓年代記」1811～1815、国立国会図書館デジタルコレクション四巻25コマ
- (13) 「三月十一日より。五月下旬まで、大入りにて、曾我祭初めて興行す。曾我祭りの根元也」
- 伊原敏郎著、河竹繁俊・吉田暎二編集校訂『歌舞伎年表第三巻』岩波書店1958年p270
- (14) 三升屋二三治「賀久屋寿々免」1845年『日本庶民文化史料集成第6巻歌舞伎』三一書房1973年p624
- (15) 伊原敏郎著、河竹繁俊・吉田暎二編集校訂『歌舞伎年表第五巻』岩波書店1960年p171
- (16) 伊原敏郎著、河竹繁俊・吉田暎二編集校訂『歌舞伎年表第五巻』岩波書店1960年p172
- (17) 赤間亮「寛政六年度の江戸歌舞伎興行記録」『論究日本文学第71号』立命館大学日本文学会1999年p31
- (18) 船遊亭扇橋『奥のしをり』アチックミュージアム彙報第21、1938年p4
- (19) 柴田量平『東一番丁物語』本の森2001年p186、初版は1944年
- (20) 注4文献p41及び注19文献p185
- 注4文献に「いま」、「きよ」など舞子7人が記されている。注21文献は「桜ヶ岡公園に、梅三楼支^{うめでうろう}店の設けられたのは明治14年(1881)で」、そこに「梅三芝居の大立物(最も実力のある俳優)、お今、お清と呼ぶ二人も」働いていたとする。「いま」は「お今」、「きよ」は「お清」と推定できる。
- (21) 注19文献p186
- (22) 注19文献p186
- (23) 注5文献p84
- (24) 千葉雄市「宮城県の民俗芸能(2)」『東北歴史博物館研究紀要2』2001年p36
- (25) 伊達政宗により慶長6年(1601)に普請が開始された。仙台城が正式名称であるが、現在の仙台市青葉区の青葉山に造られたので、雅称を青葉城という。
- (26) 仙台市歴史民俗資料館『八幡町とその周辺の民俗』仙台市歴史民俗資料館調査報告書5集1984年p71